

⑩ 日本国特許庁 (JP) ⑪ 特許出願公開
⑫ 公開特許公報 (A) 昭60-240658

⑤Int.Cl.⁴
B 65 D 47/20

識別記号 庁内整理番号
8208-3E

⑥公開 昭和60年(1985)11月29日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全6頁)

⑦発明の名称 袋状容器用栓

⑧特 願 昭59-98104
⑨出 願 昭59(1984)5月16日

⑩發明者 堀部 文夫 各務原市那加桜町2丁目361番地
⑪出願人 堀部 文夫 各務原市那加桜町2丁目361番地
⑫代理人 弁理士 恩田 博宣

明細書

1. 発明の名称

袋状容器用栓

2. 特許請求の範囲

1 簡状に形成した注ぎ口本体(3)と、注ぎ口本体(3)上面を覆うように設けた蓋体(12)と、袋状容器(1)の開口縁(2)を前記注ぎ口本体(3)の円筒部(4)に密着させるための締付手段により構成したことを特徴とする袋状容器用栓。

2 前記締付手段は注ぎ口本体(3)の後側に形成された取付突部(8)に回動可能に設けられた一対の断面L字状の締付部材(10)であり、同締付部材(10)の一側は前記円筒部(4)に圧着されるようになつてある特許請求の範囲第1項記載の袋状容器用栓。

3 前記注ぎ口本体(3)の円筒部(4)は、前記袋状容器(1)の開口縁(2)と密着するよう後側下部ほど幅広のテーパ状に形成されるとともに、その外周の前後側にはそれぞれ上下方向に

延びる尖鋭状の突条(4a, 4b)が形成されている特許請求の範囲第1項記載の袋状容器用栓。

4 前記蓋体(12)は前記取付突部(8)に嵌着されている特許請求の範囲第1項記載の袋状容器用栓。

5 前記蓋体(12)はヒンジ部(15)を中心開閉する蓋(14)と、前記締付部材(10)を保持するための係合凹部(16a)が形成された一対の支持脚片(16)により形成されている特許請求の範囲第4項記載の袋状容器用栓。

3. 発明の詳細な説明

発明の目的

(産業上の利用分野)

本発明は着脱可能な袋状容器用栓に関するものである。

(従来の技術)

従来、コーヒー用ミルク、ジュース等の容器としてガラス製のピンが用いられ、そのピンの口元にはプラスチック製の特殊な栓が螺合されていた。ところが、前記ピンの製造コストは非常に高くな

り、ミルク、ジュース等の収容物の量を多くすることができないばかりでなく、栓を別個のピンに対して接着できないため、ミルク、ジュース等を使い切ればピンのみでなく栓も使い捨てられ、省資源という点において問題があつた。

上記問題点を解消するためにガラス製のピンに代えてラミネートシート製の自立袋状容器が使用されるようになつた。

(発明が解決しようとする問題点)

前記自立袋状容器から収容物を注ぐ際、切れが悪いために容器の口元を汚したり、手あるいは衣服等を汚すおそれがあつた。

発明の構成

(問題点を解決するための手段)

本発明は前記問題点を解決するため、筒状に形成した注ぎ口本体と、注ぎ口本体上面を覆うように設けた蓋体と、袋状容器の開口縁を前記注ぎ口本体の円筒部に密着させるための締付手段により構成されている。

(作用)

あつて、前記開口縁2内に挿入され密着されるように下部ほど幅広のテーパ状に形成した円筒部4と同円筒部4の上部に形成した縁部5との間に前記開口縁2を保合させるための保合部6(第6図参照)が形成されている。前記縁部5の前側には液切り5aが形成され、両側下部には保止凹部5bが形成されている。第4図に示すように前記円筒部4には上下に延びる尖鋭状の突条4a, 4bが形成され、前記袋状容器1の開口縁2の接合部2a, 2bに對しそれぞれ保合されるようになつてている。前記液切り5a裏面には袋状容器1の密着部1bを挿入するための一対の突起7が設けられている。

8は前記注ぎ口本体3の後側上部に形成された四角柱状の取付突部であつて、その中央には前後一対の保合凹部8aを有する矩形状の嵌合孔8が透設されている。10は前記取付突部8の両側下部にヒンジ11を介して回動可能に設けられた一対のL字状をなす締付部材であつて、その外周にはリブ10a, 10bが形成され、前側には前記

袋状容器の開口縁内に注ぎ口本体の円筒部を押入し、締付手段により前記開口縁に円筒部を容易かつ確実に密着させて取付けでき、使い捨てしなくても済み、液体の切れをよくし、また、取付部からの漏れがなく、手あるいは衣服等を汚すおそれがない。

(実施例)

第1実施例

以下、本発明を具体化した第1実施例を第1～第7図に従つて説明すると、図面中1は第1図及び第2図に示すように從来の四角形状をなすラミネートシート製の自立袋状容器(レトルトパック)であつて、その上部左側には取出口部1aが一体形成され、外周の密着部1bにより収容物が密封されている。取出口部1aの上部両側には切欠部1cが形成されている。2は前記切欠部1cから上部を切り取つた開口縁である。以後、この実施例中ににおいて第1図の左方を前側、右方を後側とする。

3は前記開口縁2に取付けられる注ぎ口本体で

円筒部4の外周面との間で前記袋状容器1を圧着する圧着面10cが形成されている。また締付部材10先端には第7図に示すように指掛け部10dが形成され、この締付部材10の開放を容易にしている。

12は前記注ぎ口本体3上面に取着される蓋体であつて、前記取付突部8と対応するように形成された取付部13と、この取付部13の先端にヒンジ15を介して回動可能に設けられた蓋14とからなり、その蓋14の両側下部には第6図に示すように、前記保止凹部5bに保合され蓋14を閉鎖状態に保持する保止突部14aが形成されている。なお、蓋14の先端には指掛け部14bが設けられている。前記取付部13にはその中央から間隙16cを介して二叉状に斜め下方へ延びる一对支持脚片16が一体形成され、この支持脚片16の内側下部にはそれぞれ前記締付部材10のリブ10bに保合され締付部材10を閉鎖状態に保持するための保合凹部16aが形成されている。また、この両支持脚片16の対向する面の下端に

は第7図に示すような一对の円錐突起16bが形成され、第2図に示す袋状容器1の開封時において、ハサミがない場合に切欠部1c間に破線のように案内線を付けて、開口縫2をゆがまないようにしている。

前記取付部13の裏面には前記取付突部8の嵌合孔9内に嵌合保持される一对の嵌合部17が形成され、保合突片17aを前記保合凹部9aに保持させることにより蓋体12を取付突部8に固定するようになっている。

また、第5図に示すように取付部13には前記両嵌合部17間に斜面13aが形成されており、袋状容器1の開封時に上部の接着部1b上縁を当接させるようになっている。

次に前記のように構成された本発明の袋状容器用栓について、その作用を説明する。

さて、ハサミがない場合には第2図の袋状容器1上部の接着部1b上縁を斜面13aに当接させ、両支持脚片16を外側から挿圧して両円錐突起16bにより袋状容器1を挟みつけながら前記斜面

13aに沿つて滑動させ、破線のように案内線をつけ該案内線から上部を切離し開封する。このとき、開口縫2は直角状となる。

次に開口縫2を第1図に示すように環状にし、注ぎ口本体3の円筒部4をこの開口縫2内に挿入するとともに、液切り5a裏面の一対の突起7間に接着部1bを挿入し、円筒部4に密着保持しながら締付部材10をヒンジ11を中心下方回動させると、容器1が円筒部4と圧着面10cにより挟着されて、円筒部4外周に密着される。このとき、第1図に示す開口縫2の左接合部2aには円筒部4前側の突条4aが保合されるとともに、円筒部4後側に形成される接合部2bには突条4bが保合され、前記容器1の開口縫2と円筒部4との間には空隙ができることはない。

次いで両支持脚片16の保合凹部16aを前記締付部材10のリブ10bに保合するようにして取付部13を取付突部8に固定させる。すると、両締付部材10の上方への回動は阻止され、容器1と円筒部4との密着状態は良好に保持される。

そして、蓋14の先端を押圧し、ヒンジ15を中心に下方へ回動させれば、保合突部14aが縫部5の保合凹部5b内に保合され、蓋14は閉じた状態となる。

袋状容器1内の収容物を注ぎ出すときは、蓋14先端の指掛け部14bに指をかけ、保合凹部5bから保合突部14aが離脱するのに必要な力を上向きに加えてやればよい。

収容物（ミルク等の液体）を使いきつてしまつたら取付けと逆の操作をして袋状容器1から本発明の袋状容器用栓を取り外し、別の容器に対して取付けてやればよい。

このように本実施例では注ぎ口本体3の円筒部4を後側下部ほど幅広のテーパ状に形成し、該円筒部4外周の前後側にそれぞれ上下方向に延びる尖鋭状の突条4a, 4bを設けるとともに、注ぎ口本体3後側上部の取付突部8にヒンジ11を介して締付部材10を設けたので、袋状容器1の開口縫2に容易かつ空隙もなく確実に取付けることができ、使い捨てしなくても積み、液体の切れが

よく、また、取付部からの漏れもなく、手あるいは衣服等を汚すおそれがない。

第2実施例

次に第2実施例について述べるが第1実施例と同一の機能のものについては同一の符号を付し、その説明を省略する。

第8図に示す23は前記袋状容器1に装着する略U字状の合成樹脂製ケースであつて、一对の側板24, 25は上部ほど幅広のテーパ状に形成され、収容物を注ぐ際、袋状容器1の抜け出しを防止するようになっている、両側板24, 25の前側にはそれぞれ斜上方へ延びる支持側部26, 27が断面コ字状の接続部28を介して一体形成されている。両側板24, 25の後側にはそれぞれ斜上方へ延びる支持側部29, 30が形成されているとともに、支持側部29の内端部に形成した保合溝29aに対し支持側部30に形成した保合突条30aを保合して接続されている。

また、前記両支持側部29, 30の外端部にはそれぞれ把手31, 32が形成されており、一方

の把手31に透設した嵌合孔31a内に他方の把手32に設けた嵌合突起32aを嵌入して両把手31, 32は接合されている。

前記両支持側部29, 30の下部には側板24, 25のほぼ中央から水平方向に切欠33, 34が形成され、前記袋状容器1とのケース23内への収容あるいは取り出しへ把手31, 32及び支持側部29, 30の接合を解いて支持側部29, 30を外方へ拡開して行なえばよい。

この実施例では前記ケース23を使用することにより袋状容器1内の収容物を注ぐ際、同容器1に必要外の力が働くのを防止できるとともに、垂直立状態を安定化させることができる。また、把手31, 32をもつて収容物を簡単に注ぐことができ、形狀的にもすぐれ、販売時にはケース23内に本実施例の袋状容器用栓を収納し、その上部に袋状容器1を収容しておけばよく、袋状容器1の包装も識別可能である。

なお、支持側部26, 27の下部に対しても前記切欠33, 34と同様の切欠を対称状に設けて

もよい。

なお、本発明は前記2つの実施例に限定されるものではなく、第9, 10図に示すようにして実施することも可能である。

すなわち、第9図に示すように注ぎ口本体3にヒンジ15を介して蓋14を一体に形成し、間隙20cを介して二叉状に延出形成した先細部20aを有する突部20の両側にヒンジ11を介して締付部材10を設ける。前記突部20下面には第10図に示すように係合孔21を設けるとともに、締付部材10の内面10eには前記係合孔21に係合される係合突起22を設けて、締付部材10を締付状態に保持するようとする。

そして、前記一对の先細部20aの対向する面の先端には一对の円錐突起20bを形成し、突部20の中ほどに同突部20上面と直交する垂面20dを設け、第2図に示す袋状容器1の開封においてハサミがない場合に、この垂面20dに袋状容器1上部の落着部1b上縁を摺接させ、前記両円錐突起20bにより切欠部1c間に破線の上

うに案内線をつけるようにしてもよい。なお、前記垂面20dは斜面としてもよい。

ところで、本発明実施例ではレトルトパックの自立袋状容器1について述べたが、本発明の袋状容器用栓は従来のホット充填、無菌充填等による袋状容器についても取付可能である。

発明の効果

以上、詳述したように本発明は筒状に形成した注ぎ口本体と、注ぎ口本体上面を覆うように設けた蓋体と、袋状容器の開口縁を前記注ぎ口本体の円筒部に密着させるための締付手段により構成したので、袋状容器に対して容易かつ確実に取付けでき、使い捨てしなくても済み、液体の切れが良く、また、取付部からの漏れがないので、手あるいは衣服等を汚すおそれがないという優れた効果がある。

4. 図面の簡単な説明

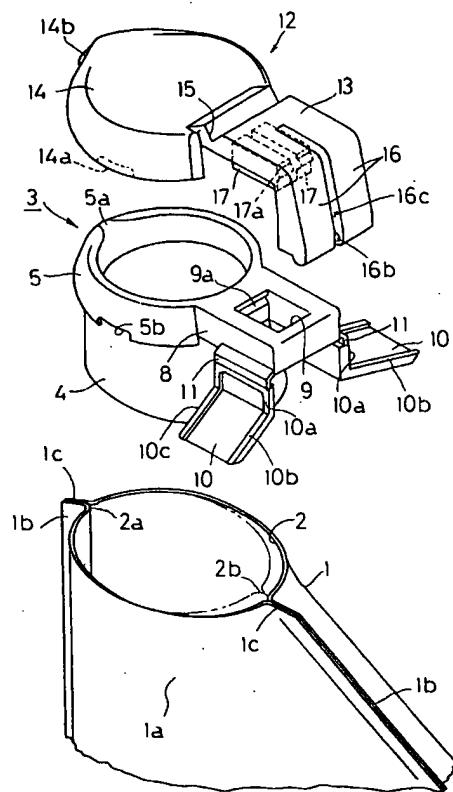
第1図～第7図は本発明を具体化した一実施例を示すものであつて、第1図は分解斜視図、第2図は容器の右側面図、第3図は右側面図、第4図

は注ぎ口本体の平面図、第5図は側断面図、第6図は第8図の△-△線断面図、第7図は背面図、第8図は第2実施例の袋状容器のケースを示す斜視図、第9図は別例を示す斜視図、第10図は同じく背面図である。

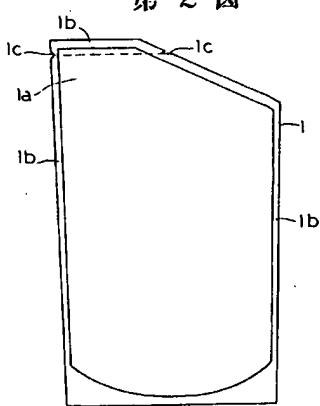
袋状容器1、開口縁2、注ぎ口本体3、円筒部4、突部8, 20、締付部材10、蓋体12、支持脚片16、係合孔21、係合突起22、ケース23、側板24, 25、把手31, 32。

特許出願人 畑 部 文 夫
代理人 弁理士 恩田博宜

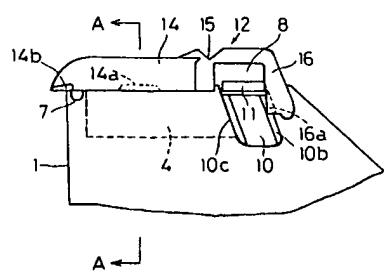
第1図



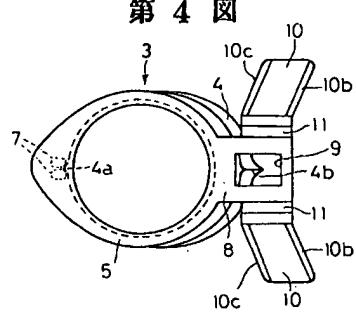
第2図



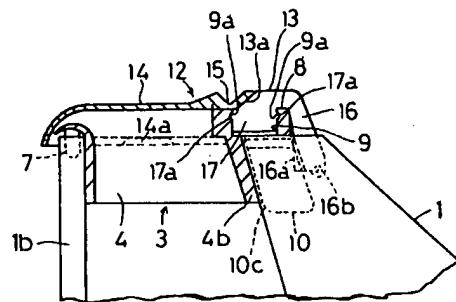
第3図



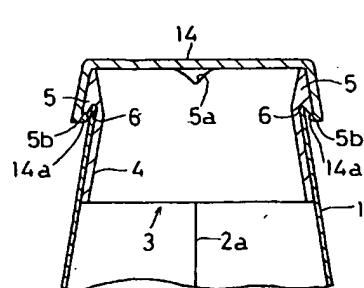
第4図



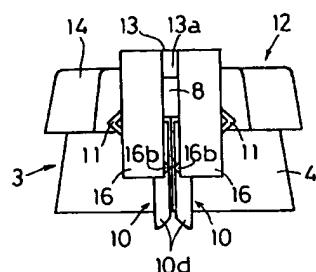
第 5 図



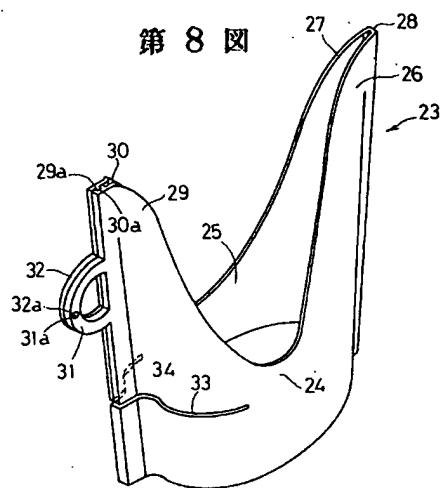
第 6 図



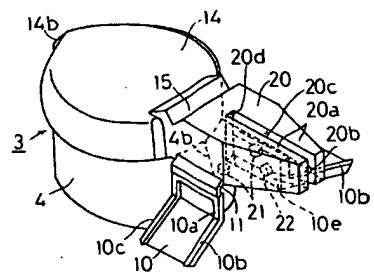
第 7 図



第 8 圖



第 9 圖



第10図

